

中世イスラーム世界における奴隷貿易

藤 本 勝 次

まえがき

古代オリエント時代から西アジアにおいて行なわれていた奴隷制をそのまま是認したマホメットは、奴隷の人道的取り扱いを強調したとはいふものの、イスラーム教徒が奴隷を使用することを積極的に禁止しなかった。中世イスラーム世界では多くの家内奴隷が使用され、またカリフや政府高官の護衛兵として、のちにはイスラーム国家の正規兵として、トルコ人奴隷が多数使用された。九世紀後半にイラクでザンジュ奴隷が大反乱を起こしていることから推測されるように、イラク低地の開拓工事やその他の土木工事の労働に従事させられた奴隷もいたにちがいない。しかし、イスラームでは、アラブ人であれ、アラブ以外の民族であれ、同じイスラーム教徒を奴隷にすることが禁止されていたから、当然奴隷の供給源を異教徒に求めねばならず、さらに加えて、イスラームでは奴隷の解放を信者の善行として奨励し、また実際に機会あるごとに奴隷を解放している。いきおいイスラーム世界の外部から奴隷を取り入れねばならなかった。したがって、対外戦争による捕虜の減少した一〇世紀頃には奴隷貿易が盛んに行なわれた。このイスラーム世界の奴隷の需要を満たすのに中世ヨーロッパの商人が重要な役割を果たしていることは注目すべきで、中世ヨーロッパにおける都市の発展の原因の一つをイスラーム世界との奴隷貿易——もちろん奴隷だけで

なく木材なども当時の重要な商品ではあるが——によってヨーロッパに流入したイスラーム貨幣に求めようとする史家も現われるほどである。^①はたして中世ヨーロッパにおける都市の発展や貨幣経済の進展の大きな要因がイスラーム世界との奴隷貿易による貨幣、とくに金貨の流入にあるのかどうかは、ヨーロッパ経済史にうとい筆者にはよく批判しえない問題である。またイスラーム社会における奴隷制自体にも多くの重要な問題がふくまれている。しかしこれらについてはしばらくおくとして、本小稿では主として九〜一〇世紀のアラビア語地誌に記載されている奴隷貿易の記述を整理し、いわばイスラーム世界の奴隷輸入経路図を作製したのである。

なお引用史料の略称は次の通りである。

- Hawqal Ibn Hawqal : *Sūrat al-ard*, *Opus Geographium*, ed. J. H. Kramers, 2 vol., Lugduni Batavorum, 1938-1939.
- Iṣṭakhri al-Iṣṭakhri : *Kitāb al-masālik wa l-mamālik*, *Bibliotheca Geographorum Arabicorum*, ed. M. J. De Goeje, 1870.
- Khurd. Ibn Khurdādhbih : *Kitāb al-masālik wa l-mamālik*, B. G. A., ed. M. J. De Goeje, 1889.
- Maqdisi al-Maqdisi : *Aḥsan al-taqasim fi ma'rifa al-aqālim*, B. G. A., ed. M. J. De Goeje, 1906.
- Ya'qubi al-Ya'qubi : *Kitāb al-buldān*, B. G. A., ed. M. J. De Goeje, 1892.
- Yāqūt Yāqūt : *Mu'jam al-buldān*, 5 vol., Beyrūt, 1957.
- Maqqari al-Maqqari : *Naḥḥ al-Tiḥ*, 10vol., al-Qāhira, 1949.

トルコ系奴隷

イスラーム圏が北方に拡大され、マールワラン・ナフル *Ma warā' al-nahr* 「河向うの地」、つまりアム河 *Jayhūn* 以北のサマルカンドを中心とした地域にまでその勢力が及ぶにつれて、マールワラン・ナフルに接する中央アジアのト

ルコ系住民が重要な奴隷供給源となってきた。

ところで、トルコ人は勇武でもってその名を知られていたもので、早くからマールワン・ナフルのペルシア系貴族の私兵として使用されていたらしいが、すくなくとも九世紀初期には、イスラーム教徒の総督や知事もトルコ系奴隷を私兵にあてていた。やがてアッバース朝カリフ、アル・ムウタセム（在位八三三—四二）は、即位前からマールワン・ナフルのトルコ奴隷を購入し、即位後には彼らを正式にカリフ親衛隊に編入し、イスラーム軍制上の大変革をひきおこしているが、このいきさつについてはすでに説明したことがあるので参照されたい^⑤。このトルコ奴隷兵はマムルーク *mamluk* と呼ばれ、イスラーム世界の各地に駐屯し、のちにマムルーク出身の将軍がエジプトのトゥールーン朝（八六八—九〇五）をはじめ多くの地方独立王朝を建てたことは周知の事実である。

九世紀の後半にイラン系サーマーン朝が独立し、一〇世紀を通じてマールワン・ナフルを支配したのであるが、この王朝の軍隊はトルコ奴隷兵を主体としたので、いきおいトルコ系奴隷の獲得は以前に増して活発となり、その過剰分はイスラーム世界の各地に輸出されている。イスタフリーの地誌には、

「マールワン・ナフルの人々が手に入れる奴隷 (*raqd*) は、その周辺に住むトルコ人であるが、必要以上に彼らの手に入るのので、マールワン・ナフルから諸地方に輸出される。このトルコ奴隷は東方イスラーム世界周辺の奴隷のなかで最も上等のものである」 (*Istakhrī* : p.288)

と述べられ、イブン・ハウカルもこれと同じような記事のあとに、

「最も利巧で美しく、値段も最高である」 (*Hawqal* : p.465)
とつけ加えている。

このようなマールワン・ナフルに北接するトルコ人の地から連れてきた奴隷は、首都サマルカンドに集められ、ここで用途に応じて養育し、訓練されたらしく、

「サマルカンドにはマールワン・ナフルの奴隷の集積場がある。そしてマールワン・ナフルの奴隷の最上等品は、

サマルカンドで養育されたものである」(Spakhri : p 318, Hawqal : p 494)

という記事によって推測される。そして、地誌にはつきりと記述されているのはブハーラの大市場だけであるが(Spakhri : p 314, Hawqal : p 490)その他の諸都市の市場でも他の商品とともにトルコ奴隷が売買されていたにちがいない。^③

マクディスイーによれば、このトルコ奴隷がマールワン・ナフルから他のイスラーム諸地域に輸出される場合、アム河を渡る所でサーマーン朝の役人によって商税が課せられたようである。

「商税 (Garba) は軽いけれども、奴隷 (raqiq) を連れてアム河を渡るのはむずかしく、若い男奴隷 (ghulam) の場合、政府の鑑札 (jawaz) がなければ通行できない。その鑑札には七〇から一〇〇ディルハムの銀貨がかかる。しかし、若いトルコ女奴隷 (qaniz) の場合には鑑札を必要としないが、「商税として」同額「の七〇から一〇〇ディルハム」を支払わねばならない。ただし年輩の女奴隷 (mar'a) は二〇から三〇ディルハムでよい」(Maqdisi : p 340)

とあり、奴隷の種類によって商税の額が違っているが、若い男奴隷の輸出に政府の通行証明書が必要とするのは、おそらくサーマーン朝が軍奴として彼らを使用するところから、ある程度の輸出制限を設けているのであろう。

つぎにマールワン・ナフルに南接するホラーサン Khurasan でのトルコ系奴隷については、イブン・ハウカルに詳しい記事が見られる。

「奴隷のうちで最も貴重なものはトルコの地から来る奴隷で、世界中の奴隷でトルコ人奴隷に匹敵するものはない。値段の点でも、美しさにしても、トルコ人に近いものはいない。若い男子の奴隷 (ghulam) でもないのに、ホラーサンで三〇〇〇ディーナルで売られた「トルコ奴隷を」私は実際に見たことがある。トルコ系の女奴隷 (qariya) なら三〇〇〇ディーナルもするものもあるが、世界中どこをさがしても、これほどの値段にまでなつた男奴隷はなく、ルーム(ギリシヤ系)の女奴隷でも、ムワッリダ muwallida ④でも、それほど高価な奴隷を見たこ

とはない。また聞いたこともない。その奴隷はすばらしい技巧で、全く正しく樂器を奏するという話で、その他のことは聞いていないが、この種の奴隷はサーマン家の宮殿やホラーサーン人の貴族や指揮官の邸宅に多くいる」
(Hawqal : p 452)

と述べられているが、トルコ奴隷のなかには、特殊な技術をもった高価なものがいたことがわかる。

ホラーサーンにもたらされるトルコ系奴隷は、マワラン・ナフルのサマルカンドから送りこまれたものにちがいないが、アラル海の南岸にあるホワリズム *Khuwarizm* 地方も奴隷貿易の中心地の一つで、イスタフリーもイブン・ハウカルもともに、

「ホワリズムの人々はもっぱらトルコ人との通商や家畜の飼育によって富んでいる。そしてトルコ人奴隷のほかに、スラブ人 *Sagaliba* やハザル人 *Khazar*、また彼らと同類の奴隷がホワリズムにもたらされる」(Isfahri : p 305, Hawqal : p 481~82)

と述べ、ホワリズムはトルコ系奴隷のほかに、特にスラブ系やハザル人の奴隷の輸入地として他の地域と區別されている。マクディスイーは、

「トルコ奴隷はファルガーナ *Farghana* とイスビーシャープ *Isbijab* から。スラブ奴隷はホワリズムから」
(Maqdisi : p 325)

とはっきり明記している。このスラブ奴隷については後述する。

またカスピ海の西岸にあるバーブ・アル・アブワープ *Bab al-abwab* が北方奴隷貿易の重要な港であったことは、「附近の異教徒のすべての地から、多くの奴隷がバーブ・アル・アブワープに来る」(Hawqal : p 340)

というイブン・ハウカルの記事で明らかであり、マクディスイーも同様にこの港を奴隷貿易の拠点として指摘している (Maqdisi : p 380)。以上アラビア語地誌からイスラーム世界の北辺にある奴隷輸入地域をひろいあげてみたが、これらの地方からトルコ系やスラブ系の奴隷がバグダードをはじめ各地の主要都市に送られたのは言うまでもない。

黒人奴隸

イスタフリーやイブン・ハウカルの地誌によると、マグリブ（＝アフリカ地中海岸）からの特産物のなかに黒人奴隸が挙げられている（*Istakhrī* : p. 45, *Hawqal* : p. 97）。この場合、アラビア語で「スーダンの地からの黒い奴隸」（*al-khadam al-sūd min bilād al-sūdān*）という表現が用いられているが、*khadam* は「召使、奴隸」を意味する *khadīm* の複数形で、この語は後述するように「去勢された奴隸」を指す場合に使われるが、ここでは去勢奴隸もふくめた意味で奴隸一般を指すものとしておく。

黒人奴隸の供給地についてイスタフリーはかなり詳しく説明しているが、それによると、

「イスラーム諸国で売られている黒人奴隸 (*al-khadam al-sūd*) は、ヌビア *Nuba*、ザンジュ *Zanj*、アビシニア *Habasha*、ベジャ *al-Buja* といった地域に居住する者ではなく、彼らよりも色が黒く、真黒ともいえる別種の間である。この人種は、アビシニアやヌビアやベジャなどのスーダンの諸地域に居住するのではなく、彼らの住地はもっと広い地域で、その南は周海^⑤の近くまで伸び、北はエジプトのオアシスの向うにある砂漠（＝サハラ砂漠）に接し、ヌビアやザンジュの地とも砂漠によつて隔てられている。彼らと諸民族とを結ぶ道路は通行困難のため、マグリブの一方面からしか文明地域に通ずることができない」（*Istakhrī* : p. 40）と説明されている。

つまりイスタフリーの言う黒人奴隸の供給地とは、エジプトの南のヌビアやアビシニア、紅海西南岸のベジャ、旧イタリア領ソマリアからタンガニカにいたるインド洋沿岸にあたるザンジュの地、これらの諸地方をふくむいわゆる東アフリカのスーダンではなくて、「真の黒人」の地であり、それはサハラ砂漠を南に越えたニジェール河流域の中央アフリカにあたるわけである。

この黒人奴隸貿易の重要な拠点がザウィーラ *Zawila* という町であったのは、

「ザウイーラの町はスーダンの地に面し、黒人奴隷の大部分がこの町にもたらされる」(Sfakhrī : p. 44)

というイスタフリーの記事から推測することができる。この町は現在のフェッザン Fazzān 地方の中心であって、地中海岸のトリポリ Atrabūs から南下してサハラ砂漠を越え、スーダンの地に入る砂漠の道の要衝であった。伝説によれば、七世紀の中頃に將軍アムル・ビン・アル・アース 'Amr b. al-'Ās がエジプトからバルカ Barga (現在のキレナイカ) 地方を征服したとき、アムルの派遣したウクバ・ビン・ナーフィイ 'Uqba b. Nāfi' がザウイーラの町に達し、ここをイスラームの支配下においていたことになっている。ヤアクービーの地誌に、

「ザウイーラの住民はすべてイバーディー派 Ibadīya のイスラーム教徒で、……彼らが捕えたミーリー族 Mīrī (?) やザガーウィー族 Zaghawī やマルウィー族 Marwī その他の黒人を奴隷として売り出し、また黒人の酋長たちも、なんのいひごも起さず、平和裡に黒人をザウイーラの住民に売っている」という話を聞いた」(Ya'qūbī : p. 345)

とあり、九世紀末にはザウイーラがイスラーム商人の黒人奴隷貿易の拠点となっていて、彼らによって奴隷狩りも行なわれ、また黒人の酋長たちと交易によって奴隷を買いつけていたことがわかる。ここで集められた黒人奴隷は、砂漠の道を北上し、地中海岸のトリポリを経てエジプトなどの諸都市に送られたのである。

白人系奴隷

イスタフリーはマグリブから送られる商品のなかに、前述した黒人奴隷のほかにスペインからの白人系奴隷 (al-khadām al-bīd) と高価な女奴隷とを挙げている (Sfakhrī : p. 45)。この白人系奴隷というのは、スペインの北辺でイスラーム教徒の捕虜となったフランク人やガリキア人の男女奴隷と、スペインを経由してスラブの地から運ばれてくる奴隷とであることがイブン・ハウカルの記事によって明らかである。

「スペインからの特に目立った商品は、捕虜となったフランク人 Afrania やガリキア人 Jahqīya の美しい男女

奴隸とスラブ人 *Saqaliba* の奴隸とである。世界各地にいる去勢された (*Castrati*) スラブ人はスペインに輸入された者で、彼らはユダヤ人の奴隸商人によってスペインの近くで去勢されるのである」(*Hawqal* : p. 110)とあり、イスラーム諸国のハレムで使用されるスラブ系去勢奴隸は、ユダヤ奴隸商人によってスペインに送りこまれ、ここからイスラーム諸国に輸出されているようである。前述したように、スラブ系奴隸はアラル海の南岸にあるホワリズムから東方イスラーム世界に輸入されているが、スペインを経由してマグリブから輸入される別のルートがあったらしい。スラブ人はイスラーム世界から遠く離れたヨーロッパの北辺に居住する民族であるのに、どうしてスペインに運ばれてくるのだろうか。このことについては、スペインの史家マッカリーの「かくわしきそよ風」に収められているイブラーヒーム・ビン・アル・カースィム・アル・カラワーという人の言葉が要領よく説明してくれている。

「この民族(フランク人)は、彼らの土地に北接する宗教の違うスラブ人と戦いを繰り返し、スラブ人を捕え、スペインの地で奴隸として売る。そのためにスペインではスラブ奴隸が多いのである。スラブ人はフランク人の庇護下にあるユダヤ人によって、フランクの地や隣接するイスラーム教徒の国境地帯で去勢され、そこから各地に運ばれる。そこでイスラーム教徒のある者が去勢のを知り、彼らも「奴隸を」去勢するようになり、そのような行為を合法と考えるようになった」(*Maqari* : I p. 140)

と。つまりフランク人が北方のスラブ人を捕虜とし、フランク人の庇護のもとに商業を営むユダヤ奴隸商人がスラブ人を去勢してスペインに輸出したのである。^⑥このユダヤ商人が当時地中海貿易に活躍していたことは、有名なイブン・フルダードビフの記事によっても明らかであるが (*Kitab*. p. 154~155) 一〇世紀頃のヨーロッパにおけるスペイン向けスラブ去勢奴隸貿易の中心地の一つはベルダンであつたらしく、ローヌ川を下ってスペイン国境に奴隸が運ばれていたと言われている。^⑦

しかしスペイン内にもスラブ奴隸を去勢する特殊な町があつたようで、マクデイスイーは、

「スラブ人はペチナ Bajjana の向うにある町へ運ばれる。この町の住民はユダヤ人で、彼らはここでスラブ人を去勢する」(Maqdisi : p 242)

と述べ、続いてその手術の方法を説明しているが、本稿ではその方法の説明は省略しておく。スペインにおけるこのユダヤ人の町について詳しいことは不明で、ペチナの近くであったことしかわからないが、ペチナというのは、

「ペチナは荒廃してその住民はアルメリヤ al-Mariyya (＝南スペインの海港)に移住してしまつた。ペチナとアルメリヤの間は二ファルサフ、グラナダとの間は一〇〇マイル、つまり三三ファルサフである」(Yaqut : I p 494) というヤークートの記事からして、一三世紀には荒廃してしまつたが、一〇世紀頃には存在していたスペイン南端の町である。

去勢奴隸についてはマクデイスイーに詳しい記事が見られる。

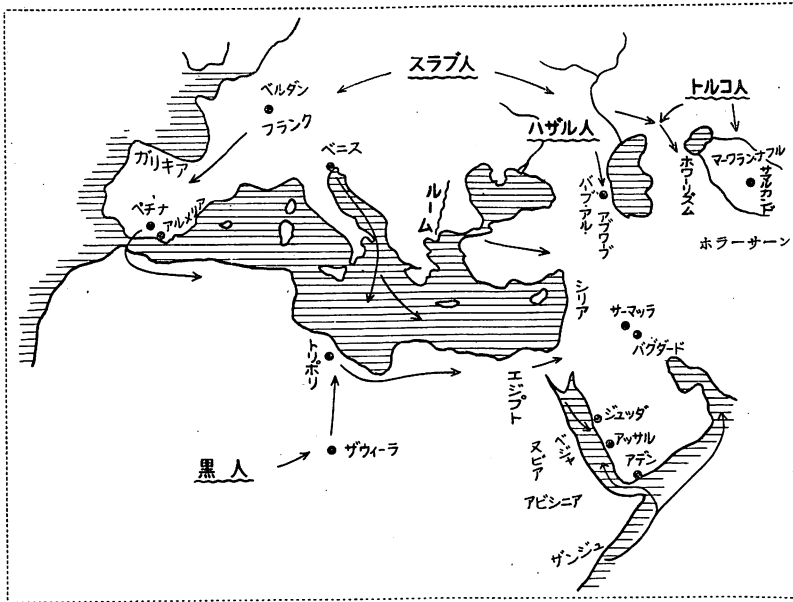
「去勢奴隸 (Khadim) には次の三種類がある。(1) エジプトに運ばれる最もすばらしい上質の奴隸。(2) アデン (＝紅海岸の港) に運ばれるベルベル人奴隸で、最も劣悪なもの。(3) アビシニア人の類いの奴隸。

白人系の去勢奴隸には次の二種類がある。(1) スラブ人奴隸。彼らの住地はホワリズムの向うであるが、スペインに運ばれて去勢され、それからエジプトに輸出される。(2) ルーム奴隸はシリアやその他広範囲の地域にもたらされるが、すでに国境の廢墟で去勢されたものである」(Maqdisi : p 242)

と述べられているが、スペインを経由してエジプトに送られるスラブ系奴隸のほかに、ビザンツ帝国と境を接するシリアなどでは、ルーム人の奴隸、つまりギリシア系の去勢奴隸が獲得されたようである。マクデイスイーはこれら去勢された人から実際に聞いた話を記載して、

「私が彼らにどうして去勢されたのかと尋ねたところによると、ルームの人々は子供を盗んできて寺院に監禁し、女性に気をとられず、欲望でお互に傷つけないように「去勢」したことがわかつた。そしてイスラーム教徒がルーム人を征服して寺院を掠奪した時、その子供たちを寺院から連れ出したのである」(Maqdisi : p 242)

と述べている。この記事だけでは、子供を盗んで寺院に監禁して去勢する目的が、彼らをイスラーム諸国に奴隷として売り出すためかどうかは不明であるけれども、イスラーム軍がビザンツ領内に進入した際に、これら去勢された者を捕虜とし、奴隷にしたこともあったらしい。



つぎに白人系奴隷のなかで、ルーム系の高価な若い男

奴隷 (Shihān) がマグリブの特産品としてイブン・ハウカルの地誌に挙げられている (Hawqal : p.97)。このルームの奴隷がマグリブにもたらされるのは、おそらく地中海を渡ってトリポリなどの港に運ばれたものにちがいない。このルーム系奴隷貿易は、イタリアのベニスの商人によって行なわれたもので、当時ヨーロッパのイスラーム世界向けの奴隷貿易がもっぱらユダヤ商人の手になることは間違いないが、八世紀から九世紀にかけて、ベニスの商人が奴隷貿易に参加し、北アフリカの諸港に運ぶ利益のある商売のために、彼らはローマにおいてさえ奴隷を買い集めたらしく、ビザンツ皇帝レオ五世によって彼らのシリア、エジプト貿易が禁止されているが、その後も続けられていたと考えられる。

そのほかにマクデイスイーは、紅海岸のジッダとかアッサル、Athhar などアラビア半島の諸港で課せられる商税について説明した箇所、奴隷には一人につき一デ

イナールの税額であったと述べているが (Maqdisi : p 104) 、具体的にどの地域から来る奴隷であったか不明で、おそらく東アフリカのザンジュ奴隷なども多くまかれていたであろうし、イラク南部にザンジュ奴隷の反乱が起こっていることからみて、ペルシア湾岸の諸港にも送られていたと推測される。

以上、主として二〇世紀のアラビア語地誌に記載されている奴隷に関する記事によって、イスラーム世界への輸入経路について説明してきたが、最後に参考までに地図で示しておく。

註① 鯖田豊之「らわゆる商業ルネッサンスについて——ノルマン経済圏の発展と関連して」(史学雑誌六四ノ八・昭三〇)、「ヨ

ーロッパ中世の奴隷商業」(西洋史学三一、一九五六)参照。

② 拙稿「カリフ・ムウタシムとトルコ奴隷兵」(石浜先生古稀記念東洋学論叢・昭三三)

③ ヤアクービーはイラクのサーマッラーにある奴隷市場について「奴隷市場は路地の入り組んだ街区にあって、「奴隷を入れておく」部屋や二階部屋、陳列する店が列んでいる」(Ya'qubi : p 260)と述べている。

④ muwallida とらうのは普通「助産婦」の意味のアラビア語であるが、奴隷の場合には、カリフや高官の妻となつて子供をもうけることができるほど美しく、すべれた女奴隷のことをらう (Hawqal : p 97)。マッバース朝のカリフのなかでマフネーとマミーンを除く「すべて母親はペルヘル人やトルコ人やスラブ人の奴隷であった (Hitri : History of the Arabs, p 332)。

⑤ 「周海」al-bahr al-muhit とは、らわゆる旧大陸の周囲をかこむ海のことだ、アラビヤ人は地図を書く場合、大陸の周囲を円形の海でかこみ、その周海から東にはシナとインドの海が、西には地中海が入りこんでいる。

⑥ Encyclopaedia of Islam : IV p 1219

⑦ Yaqut : II p 360

⑧ 佐藤圭四郎「アッバース朝史叢記」(イスラーム世界一一九六三)の「スラサ奴隷」の項。

⑨ A. R. Lewis : Naval Power and Trade in the Mediterranean, Princeton 1951, p 180~181

⑩ ibid. p 116, 177